

『いきなり悪魔のドS花嫁!?!』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

「満はなんでそう、俺に冷たいの？ すっごい傷付くんだけど！」  
自分はこれっぽっちも悪くないという態度をされて、眉間に皺が寄る。  
この一大事を引き起こして、天使のような顔をするなど言いたい。

「俺んちの座敷から登場しておいて、それはないだろ。つか、非常口ってなんだよ」

「人間が描いた魔方陣は非常口になる。たとえそれが失敗していても、一度消されてもね。あとはしっかり残るんだ。俺たちにとっちゃ結構都合のいい出入り口なんだよ。お忍びで遊びに来るときとか使えるし」

「……じゃあ、魔方陣を描いて魔物が出てくるってことはないのか？ よくあんだろ？ 何かを召喚したって」

友人から借りたゲームとマンガの知識だが、丑（うし）の刻参りだって現実に存在するし、呪われたから裁判を起こすという話も聞いたことがある。都市伝説ならそれでもいいが、満は好奇心に突き動かされた。

「出てくるよ。完璧な魔方陣なら。でも、召喚されるのは魔族じゃなく魔物だ。人間には荷が重いというか、召喚した人間は餌だと思って食べちゃうし。それを採って連れ帰るのも、俺たちの仕事なの。野良魔物にしたら、こっちの世界に迷惑でしょ？ 人口が減る」

分かった。たった今分かった。テレビの特集で騒がれる未確認生物は、この世に召喚された野良魔物なんだ。

ニコニコと「首輪をつけて連れて帰るんだ」と説明するアレックスの前で、満は世の中のミステリーを解明してしまった。

「あと、俺が出てきた非常口は、恋愛用の魔方陣だね。思いっきり失敗してるけどさ」

姉さん……っ！ この場になくてよかったなっ！ いやまで、あの姉ならアレックスを見た瞬間に「私の真の運命の人」と叫んで抱きついたに違いない。立派な角が生えていても「それもまた個性よ！」で済ますんだろう。目に浮かぶ。ほんと、この場に姉がいなくてよかった。

満は異国の姉を思って安堵のため息をつく。

「でさ、仕事が終わったら満は俺と一緒に魔界に行くよね？」

「行かねえよ！」

「男同士だからって恥ずかしくなくてもいいよ？ だって、穴なんていくらでも増やせるし、男のまま妊娠だってできるんだから。俺、満似の子供なら何人いてもいい。きっとみんな宝石みたいに綺麗な目玉をしているんだろうね。生きた宝石をいっぱい侍（はべ）らせられるなんて、最高だと思わない？」

「思うかよ変態野郎！」

口調が荒くなるのは仕方がない。目の前の男が綺麗な顔でとんでもないことを言うからだ。

「変態って、それ、褒め言葉だから。俺はまだ若いし、経験不足だし、そこまで極めてないからさ。だから今回の仕事でいろんな経験値も積もうと思ってる」

「そうですか」

「だからさ」

アレックスは突然満の右手を掴み、自分の両手でそっと包み込んだ。黒に金色の装飾を施してある長い爪で引っ搔かれなかったのは偶然じゃないと、その目が語ってる。

「人間に恋をするっていうのは、とても馬鹿馬鹿しいし有り得ないと思ってた。だって俺、今まで遊んだことしかなかったんだ。その点では、人間はとっっても抱き心地がよくて最高の愛（あい）玩（がん）動物だって分かる」

「俺の手を掴んで言うことかよ。最低だな悪魔」

「だから悪魔じゃないってば！ 俺ね、どうして今まで満と出会わなかったんだろうって不思議でたまらないんだ。この目だよ？ この目。夜露に濡れた黒い宝石。こんな綺麗な『夜のとばり』を見たのは初めてだ。生きた宝石って素晴らしい。愛してる！」

「キモいっ！」

満はそう言い放つと、左手でアレックスの頭を叩く。魔族だからこれくらい痛みは感じないだろう。

「なんで俺の愛が伝わらないんだよ！」

「俺にゲイの知り合いはいないけど、もしいたとして、そんで、俺に告白したとしても、今お前が言ったようなお粗末なことは言わないと思うぞっ！ 告白するなら『お前の全部が好きだ』ぐらい言えよ、ほんと失礼なヤツだな」

「だって、俺の真剣な顔を見たでしょ！」

「男が『だって』なんて言うな！ ガキが！」

ビシビシビシと、満は立て続けにアレックスの頭を叩く。

そのたびに彼は「やん」だの「やあだ」だの可愛い声を上げるから、満は何発か余計に叩いてしまった。

「ほんとっ！ すっごい痛いんだけどっ！ 初対面の魔族の頭を叩く人間なんて、初めて会ったよ俺っ！」  
「……あー、そうだな。成り行きとは言え、ちょっと力を込めすぎた。すまない」

綺麗な金髪が叩かれてボサボサになっていたの、それを直すように今度は優しく撫でてやる。さすがは人外というか、触り心地は最高だ。絹糸の束に手を突っ込んだら、こんなサラサラとした気持ちのいい感触だろうか。ずっと触っていたい気がする。

しかし、頭の両側にある立派な角に視線が向いてしまうと、もうそれしか考えられない。

なんだっけ、グルッてなってる羊の角ってなんて言うんだっけ。姉さんがなんか言ってたんだよな、ええと……………ア、ア、そうだ！ アモン角だ！

思い出してスッキリした満は、つい、出来心でアレックスの角を握った。両手鍋の取っ手を持つように、両手でしっかりと。

「おー……彫刻したような細かい模様が入ってるけど、意外としっかりした作りなんだな。あと、つるつるとして触り心地がいい。髪と目は金色なのに、角は真っ黒って、面白いなお前」

「な？」とアレックスの反応を覗いた満は、彼が真っ赤な顔で震えているのを見て、慌てて手を離れた。

「そんなに、角を触らせるのがいやだった？ ごめんな？ほんと、わりい」

「ち、違う……どうしよう俺、まさか人間の奥さんをもろうことになるとは思わなかった。奥さんは巨乳で腰が細くてお尻がおおきくて、太腿はムチムチしてる、白い角を持った美人って決めてたのにつ！」

「お、おい」

とても嫌な予感がするから声をかけたのに、アレックスは顔を赤くしたまま瞳を輝かせて満を見つめる。

「でも、これもまた運命？ みたいな？ やっべ俺！ こっちの世界で奥さんに捕まっちゃったっ！ こんな積極的な奥さんは、魔界にもいないっ！ 有無を言わず俺の角をむんずと掴むなんて……素敵すぎる……っ！」

満は手のひらに汗が滲（にじ）んだ。

これは人生最大の危機だと、体が警告している。

「あのな？ 俺はこの世界の生き物だから、お前の世界のルールは適用できないぞ？」

「命の次に大事な角を、断りもなく握り締めておいて、そんなことを言うなんて酷い……」

切なげな表情でじっと見つめられて、満の頬がカッと熱くなった。

涙で潤んだ目もヤバイ。背中を丸めての上目遣いなんて、あざといとしか言いようがない。とにかく、可愛くて可哀相で、満の胸は瞬く間に高鳴った。

「いや、その……」

「相手の角を握り締めるのは、『お前を絶対に離さない』って意味で、つまり、夫婦ってこと。恋人同士だって角は掴まない。他人の角を掴むのは無礼極まりない行為。決闘になる」

「はあ……」

「結婚式の最後で、招待客の前で新郎新婦が互いの角を掴んで見せるんだ。俺たちは夫婦になりましたっ」

なんか闘牛みたいだな……とは、言える雰囲気じゃなかった。

満は「そうなんですか」と生返事しかできない。えらいことをしてしまった。

「こんなこと、例外中の例外だけど、それを言ったら、誰かに頭を叩かれるのも生まれて初めてだから、俺は今日、満から初めて尽くしをもらったことになる。いっぱい初めてのありがとう、満さん。俺はいい夫になるよう努力するから、俺の子供をいっぱい産んで」

すっと顔を上げ、はにかみながらもそう宣言するアレックスは、まだどこか幼さを含んではいたがとても美しい。

ここで頷いたらきっと人生楽勝なんだろう……と思っても、満は頷かなかった。首を左右にも振らない。

「あのな、ひとまず保留にしてくれるか？ 世界を股にかけた事件だ。簡単に決められない」

「待ってもいいけど、なかったことにはできないから。こいつが全部……記憶してる」

アレックスがスーツの内ポケットから取り出してテーブルの上に置いたのは、旨そうな桃色のボールだ。大きさはうずらの卵ぐらい。

それが、床に置かれた途端ににゅんと何本かの触手を出して、そのうちの一本で満に手を振った。いや、振っているように見えた。

「可愛いけどキモいな、こいつ。なんなの？」

「高性能生体通信機器兼、俺の話し相手兼、触手。ピンク色だからピンクって呼んでる」

「実に悪魔らしいアイテムを出してきたな。触手かよ……」

おそるおそるてっぺんを指先で触ると、ぷるんと気持ちのいい感触。絡まってこないのを良いことに撫でてやると、ぱかっと小さな口が開いた。歯はないが、パクパクと口を動かしているのがちょっと可愛い。

「こいつも満さんを気に入ったようだ」

「あーそー」

「こいつは生きた記憶装置でもある。だから、俺たちの会話はすべて記録されてるから！」

「けど、こいつを殺せば……」

「分裂するだけだから無駄。それに殺すのは勿体ないよ？俺たちのセックスライフに取り込んでいこうね。みんなやってることだから問題ない」

「こんな小さいヤツが何の役に立つんだよ。いや、する前提で聞いてるわけじゃないからな？勘違いすんなよ？」

「いろいろ使えるよ？試してみる？」

「やめろ」

「俺たちはもう夫婦なのに！」

「だから、そういう複雑なことはひとまず保留って言った。ちゃんと考えるから待ってろ」

「……うん」

半べそで頷く姿はどう見ても高校生で、少しばかり罪悪感が湧く。

「とにかくお前は、こっちの世界でやる仕事があるんだろ？それを済ませてから考えよう。な？人間が食われちゃ困るし」

「じゃあ、俺の世話してくれるんだよね？」

「するしかないんだろ？ったく」

きっかけがなんであれ、関わってしまったのだから仕方がない。満はよしよしとアレックスの頭を撫でた。

「俺は子供じゃないんだけど」

「その外見なら、こっちの世界じゃ十分子供だ。警察に補導されないように気を付けろよ？」

「満さんは補導されないの？」

「俺は二十歳だから問題ない。こっちの世界では成人として……」

「知ってる。前に遊んだ女の子に聞いた。人間って年を取るのが早い。俺は生まれて二百年で、ようやくこの姿になったのに」

そろそろ二杯目のお茶でも淹れようかと思ったときに、この衝撃。

満は「悪魔も年を取るのか？」と尋ねる。

「魔族です！大体、二百年目の外見で止めちゃうかな。中には、もっと若いうちに外見の成長を止める魔族もいるけどさ。やっぱ、これぐらいの体が一番楽しい」

「分かった。とにかく今のお前にスーツは似合わないことが分かったから、あとで私服を貸してやる。学生服を着た方が似合う顔でスーツを着てると、そっちのが目立つぞ」

アレックスは今度はコクコクと素直に頷き、「奥さんに従います」と笑顔になる。

誰が奥さんだよ。どうせゲイなら俺を旦那にしろってんだ。

心の中でサクッと突っ込みを入れつつ、満は「お前の服を用意するか」と立ち上がった。

半袖のTシャツの上にフード付きのパーカー、下半身はゆったりめのワークパンツに着替えさせると、アレックスは普通の高校生に見える。角はついているし金髪だが。

「この角な、外に出るとき隠せるか？俺は結構カッコイイと思うけど、一般のみなさんはもれなく悲鳴を上げると思う。あと、仰向けでしか寝られないから辛いだろ」

アレックスのスーツをもう使っていない両親のクローゼットに入れて、満が言った。

まさか両親の部屋で魔族のお着替えをするとは思わなかったが、遺影の二人は何も見していないかのように微笑んでいる。アレックスも仏壇に興味を示さないので、親のことはスルーした。

「角は当然隠すよ。寝るときは……考えたことなかった。ふつーに寝てる」

「枕に穴を開けたら怒るからな」

「丈が短い……」

パーカーはゆったりめだが、本来くるぶしまで隠すはずのワークパンツは、アレックスの足首を丸々見せていた。

「あー……、身長が違うからな」

「俺の足が長いから」

「何か言ったか？」

「俺の奥さんは小さくて可愛って」

「小さくねえよ！」

いいスナップを利かせてアレックスの肩を叩き、「お前用に何着か買わないと」と言った。

「自分で買いに行く。ついでに今の世の中も見てきたいし」

「迷子とか……」

「非常口を感知できるから問題ない。あとね……」

アレックスはそこで一（いっ）旦（たん）口を閉ざし、いきなり満の額にキスをした。

「うわあああっ！ 何すんだっ！」

悲鳴と共に渾（こん）身（しん）の蹴りをお見舞いする。

アレックスは少し揺らいだが、倒れることはなかった。

「災い避（よ）けをただけ！ 災い避けっ！ あと、俺の奥さんですって印もつけました！」

「ふざけんなよ？ 悪魔野郎」

「魔族です！ 満さんが犯罪者に食われないようにするお守りです！ 俺のキスって凄（すご）いから安心してっ！」

不安しかない。

しかもキスをされた部分が熱くなってきた。気になって母の鏡台から手鏡を拝借して自分の顔を映した。

額に金色の、花のスタンプが押しあてられている。

「なあおい……これは一体なんだ。この模様は、俺は覚（おぼ）醒（さ）めた正義の味方か。第三の目が開いたらどうしてくれる」

言っていることはめちゃくちゃだし根拠（こんきょ）なんてどこにもない。こういうマンガを、以前友人に借りたことがあったのを思い出す。どうでもいい記憶だが、それだけ今の満は混乱（こんらん）していた。「奥（おく）さん」と言われるのもどことなく卑（ひ）猥（わい）で嫌（きら）だったか、キスの衝撃（しょうげき）は段（だん）違いだ。

生まれて初めて同性にキスをされた。

どこに出しても恥（は）ずかしくない美形（みけい）だ。むしろ連れて歩けば誇（こ）れる。角（かど）がなければ。しかし、だからといってキスをされていいわけじゃない。

アレックスは「俺にキスをされて怒（お）ったのは満が初めて」と文句（ぶんこう）を言っているが、ここはしっかり躡（しつ）けておかなければ後々（ごご）自分が困（こ）る。

満は「こっちに来（こ）い」と言ってリビングに移動（いどう）すると、ソファでなくラグマットの上にアレックスを座（ま）らせる。

正座（せいざ）も胡座（あぐら）もできなかった彼は、体育座（たいぶざ）りをして、満の説教（せいかう）を聞いた。

「そもそも、俺はゲイ（ゲイ）ではない。付き合ったのも女性（にょせい）だけだ」

「うん」

「そんな俺（おれ）が、お前（まへ）の住（す）む世界のルールとやらで『奥（おく）さん』と呼ば（よ）ばれることになった」

「うん」

「それはもう仕（し）方がない。だがな？ 行（い）動（どう）を起（お）こすとすると話は別（べ）だ。勝手（勝手）に動（う）くな。俺（おれ）の許（もと）可（か）を得（え）てからしろ」

「キスしていいって聞いてからキスするってこと？ そんな……カッコ悪（わる）う」

「黙（もく）りなさい。諸（しよ）事情（じやうじやう）によって、仕方（仕方）なく結（むす）ばれた婚（こん）姻（いん）関（かん）係（けい）なんだぞ？ ノーカンにしたいくらいなんだ。知（し）ってたら俺（おれ）は絶（た）対（たい）にお前（まへ）の角（かど）は触（ふ）らなかつたって」

「でも、触（ふ）りたくなるほど立（た）派（ぱ）だったんでしょ？ ね？」

「ご立（た）派（ぱ）です。……だからな？ 俺（おれ）たちは接（せ）触（ちやく）に気（き）を付（つ）けなくてははいけない。愛（あい）だの恋（こ）いだの夫婦（ふうふ）だの言（い）ってより先に、お互（たが）い大（だい）事（じ）な仕（し）事（じ）がある」

「それはそれ、これはこれ、でしょ。俺（おれ）、満（まん）さんとの夫（ふう）婦（ふ）生（せい）活（くわく）と仕（し）事（じ）を両（りやう）立（た）せせる自（じ）信（しん）あるし。特に夜（よ）の夫（ふう）婦（ふ）生（せい）活（くわく）は充（み）実（じつ）させたいし」

「保留（りやう）だって言（い）ってんだろうが。一（ひと）人（にん）で先（ま）走（まわ）るなよ」

「でも、夫（ふう）婦（ふ）という現（げん）実（じつ）は本（ほん）物（ぶつ）」

泣（な）きそうな顔（かお）で「夫（ふう）婦（ふ）」と繰（くり）返（かえ）すアレックスが少しばかり可（あ）哀（い）相（さう）にな（な）って、満（まん）はつい、譲（じやう）歩（ぽ）案（あん）を口（くち）にした。

「スキンシップ（スキンシップ）は許（もと）す。だが夫（ふう）婦（ふ）の営（えい）みとかさ（と）うい（い）うのはなし。夜（よ）の夫（ふう）婦（ふ）生（せい）活（くわく）な（な）どもつ（つ）てのほ（ほ）かだ。い（い）いな？ 婚（こん）姻（いん）関（かん）係（けい）が保（りやう）留（りやう）なんだからな！ 俺（おれ）たち（ち）は！」

「手（て）を繋（つな）いでいい？」

「家（か）の中（ちゆう）なら。外（ぐわい）じゃだ（だ）めだ」

「抱（か）き締（し）めてもいい？」

「家（か）の中（ちゆう）なら、適（た）当（たう）にし（し）ろ」

アレックスは瞬（しゆん）間（かん）に笑（わら）み（み）を浮（う）か（か）べ（べ）て頬（ほ）を染（ぞ）め、「満（まん）ちゃん大（だい）好（こう）き」と言（い）う。

凄（すご）く可愛（かわい）い顔（かお）にな（な）っているが、それ（それ）に見（み）惚（と）れ（れ）たら負（ま）けだ。尻（しつ）に敷（敷）かれる。

満はわざと厳しい表情を浮かべて、アレックスを見た。

「人間的な外見だと俺の方が年上だ。ちゃん付けはなし」

「はい満さん」

「万が一補導されたらいろいろ聞かれるんだぞ？俺が保護者になるとしても、もっとこう……いろいろ決めておかなくて大丈夫なのか？」

「どうにかなると思う」

もういいや。変に教え込むより、好きに呼ばせよう。その方が逆にボロが出ない。

満は小さく頷いて「好きにしろ」と言った。

本文25P～39Pより抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>